

本文

一番

左勝 霜

親と子の霜夜をかこふ野馬のうま哉

溪石

右

霜ふかし扇をかざす夜の舟

勇招

「ものいはぬよものけだものすらさへも

あはれなるかなや親の子をおもふ」

とよみたまひしこのうたたよりに便し

て、野馬の子をいとふさませつなり。

右の句、さもあるべきながら、左の句

秀逸なれば、まけ侍らむかし。

現代語訳

左勝 霜

親と子の野馬が、霜夜の寒さからお互いを守るように身を寄せ合っている。

* 「霜夜」は霜のおりた寒い夜。「かこふ」は外の力が及ばないように周囲をふさぐことから、守りかばう意となる。「野馬」は放し飼いにしている馬。囲われてはいない野馬の親が、寒さのためお互いを「かこふ」としたところに、表現上のおもしろさがある。なお、「霜」は初冬十月のものとして扱われる。

右

霜が深くおりにている。その冷たさに対して、夜舟の中で扇をかざしている。

* 「霜ふかし」は和歌・連歌・俳諧を通じて散見され、ここは霜夜のしんしんとした寒さの表現。「扇をかざす」は光や視線などを避け扇で顔を遮ること。「あつき日や扇をかざす手のほそり 印苔」(『続猿蓑』)のように、暑い日に行うのが一般で、それを霜夜の行為としたところが作者の工夫。「霜」と「月」はお互いを見立てにも用いることから、ここも、月光に対してかざす扇を霜に対してお互いを見立てた趣向した、と見てよいかもしれない。「夜舟」は夜間運行の乗合舟で、「淀にて／はつしもに何とおよるぞ船の中 其角」(『猿蓑』)などに通う情が認められる。一方、漢詩「楓橋夜泊」の影響を想定すれば、停泊した舟の中と見ることもできる。なお、季吟は『山之井』で「霜」の詠み方を解説し、「霜夜はことに空さえて、月の光りもさむけだち、風もみのいりて、ねびえお

どろく心ばへ」と記している。

(判詞)

「物いはぬ四方のけだものすらさへも哀れなるかなや親の子を思ふ」と(実朝が)お詠みになった、この歌をよりどころに読むと、野馬(の親)の子をいたわる姿が、切実なものとして迫ってくる。右の句も、そんなこともあるだろうと思わせるものながら、左の句がきわめてすぐれているので、負けであるだろうね。

* 「ものいはぬ…」は「慈悲のころを」の前書をもつ源実朝の歌で、『金槐和歌集』では第三句が「すらだにも」。果たして、芭蕉はこれを左句の典拠として指摘したのか、どうか。当時、この歌が広く流布していたとは言い切れないことから、典拠の指摘ではなく、句から想起したのがこの歌である、と理解しておきたい。「便して」は手がかりにしての意で、ここでは芭蕉がその主体ということになる。

「せつなり」は、深く切実な様子であることや、そのような情がこもっていることに対していう語。「深切なり」と同義の語であると見てよく、「深切」は天和期前後の芭蕉を考える際の、鍵となる語の一つ、たとえば、『俳諧合』「田舎」五番の判詞で、「左 徳利狂人いたはしや花ゆへに社／右 桜狩けふは目黒のしるべせよ」に対し、次のように記している。

徳利をいだいて花にたはぶる狂人、深切也。又、目黒が原の遠のさくら、尤やさし。上野・谷中のさくらを見つくしたる体、言葉の外にあらはれたり。両句、幽玄、差別なし。

「さもあるべし」も判詞に使われる語で、『俳諧合』「田舎」十三番では、「左袖の露も羽二重気にはぬぬもの也／右 夢と成し骸骨踊る荻の声」に対し、

羽二重の袖の露は、「貴人の心に秋至らず」と作れる詩の心を思ひよせられたるにや。右また、骸骨の荻の声をかりたる、さもあるべき事ながら、

左の感浅からず覚え侍る。とあり、芭蕉の場合、一応は認めながら、相対的に負けと判定する際に用いていることが、ここでも確認できる。

「秀逸」もまた判詞に多用される語で、やはり『俳諧合』における芭蕉判詞の中にも見られる(例示は省略)。では、右の句を退け、左の句を「秀逸」とした理由は何か。第一に、霜夜の寒さから身を守る点で、両句は共通するもの、右が自分のための行為であるのに対して、左は親子のかばい合う姿をとらえている点。実朝歌を髣髴させることも含めて、そこに「せつなり」と感じさせるものがあるといえよう。第二に、どちらにも観念的で言葉遊びに通じる側面はあるものの、左の「かこふ」ではそれが句の背後に隠れ、一句として自然な情景句ともなっているのに対し、左の「霜…扇をかざす」にはそれが露骨であるという点。ここに芭蕉のめざす方向が垣間見られるのだと思われる。